

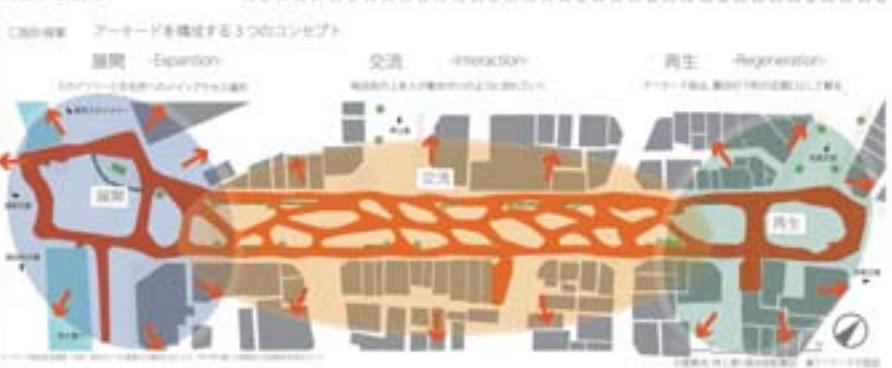


## アーケードからつくる街 押上通り商店街を再生する空間の提案

獎勵賞

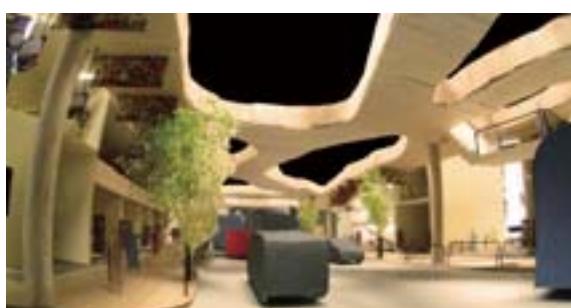
梅田 信太郎 (うめだ しんたろう)  
千葉工業大学 工学部 デザイン科学科

アーケードからつくる街 -押上通り商店街を再生する空間-



日本各地には時代と共に衰退しつつある商店街が数多く存在する。東京の新名所である墨田区押上にある押上通り商店街もその一つである。スカイツリー開業で賑わう下町に置いて利用者減少により活力を失いつつある商店街の再生を主題におくことで、商店街の再生にスポットを当てつつ同時にスカイツリーと共にこれからを生きて行く押上の新しいあり方を提案したい。

そこで商店街に掛かるアーケードに着目し、人と街とが繋がるに空間に変化させることで利用者減少を止める事が出来ないかと考えた。アーケードに歩道機能を持たせ、隅田川流れる墨田の街の営みを川の流れに見立て、人と街との触れ合いを考えることで住みなながら地域を蘇らせる空間を街の輪郭から創り出す。それらは活気を生み出し、新しい時代の街を形成していく。



講評

隅田川や北十間川にゆらめく水面をイメージしたアーケード。その上部を歩けるように、グランドレベルの商店街とも立体的に行き来しやすいように、活気と潤いのある街を取り戻すための提案である。グランドレベルは水の揺らぎのような光と影、アーケードに取り付くバナーやインスタレーション、人の動きなどが交錯し、臨場感あふれる空間に変貌する。2層に渡る歩行者動線は、商店街上階の空スペースにも眼を向けたもので、ビル群を立体的に結び付け、相互に行き来しやすい関係性の強化も企図されている。一般的に、みちゆく人の流れは、集客力のある二極の間に生まれる。この提案の一方の極はスカイツリーで、開業以来にぎわう大勢の人々をこの商店街に引き寄せようとしている。アーケード反対側はかつて大勢の人々で賑わった工場街であり、そのエリアの再生にも大きな関心を寄せている。もとよりものづくりが息づく場所。その具体案も次なるテーマとして欲しい。

都市へのまなざしは、継続してこそ深まるものだからである。  
(審査委員・柳瀬寛夫)